

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 篠原 俊一

平成二十七年を迎え、謹んで御祝詞申し上げます。

旧年中は、当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡見学会・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も三十三年目を迎え、県内外から高く評価されているところでございます。この『ながさきの空』も定例の発刊を重ね三百九十号を刻むこととなりました。

本年も『長崎学』を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献してまいりたいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

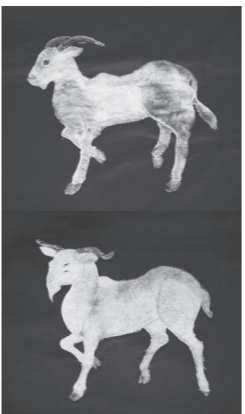
平成二十七年

未年によせて

越中 哲也

今年は何暦の干支(十干十二支)によると「乙未」の年となる。前回の未年は平成十五年で干支は「癸未」であった。

中国の「歴法」で「十干」の文字が使用されるようになったのは春秋時代以後の事であり、五行の相勝説・相生説の二説が並び行われ、それに「兄弟(上下)」をつけて「十干」が形成されたのは陰陽家・星家などの考えが加えられたからであろうと説明されている。十干の「甲」の文字は「キ(木)のエ(兄)」、乙の文字は「キ(ト)弟」、丙の文字は「ヒ(火)のエ」、丁は「ヒノト」…と我が国では読んでいる。



未 (桶屋町傘鉾幕の長崎刺繍)

そして「甲」の文字についての説明は中国の古書によると「甲」は「甲冑」で鎧をあらわし、万物「種」の甲を被って出る意を示し、「乙」は「軋」の文字と音が合い通じる故

乳汁は諸人呑む也。諸病に可也。鬱症の人・別して功能あり。急ぎ歩み馳す事なし寛々静也。啼声は人兒の歎に似たり。

出島のオランダ商館内にも羊は食用として飼育されていた。昭和五年刊の「長崎出島の食文化」のうち「出島商館跡出土の動物遺存体」について金子浩昌氏の報告書に次のように記してある。

この動物の遺骸の出土は多くない。近世の遺跡でヒツジの骨の検出は本遺跡で初めて知られたもので本遺跡の特徴とすべき動物と言える。骨の出土量の少ないのは飼育数の少ないことは需要・飼育条件などが関連しているであろう。然し其の後の長崎市内遺跡調査でもヒツジの骨を検出している。量的には牛より少く、どの遺跡でも特に多いと言う事はない。勿論、江戸の遺跡で此の種の動物の遺骸を検出することは今までのところないようである。オランダ商館図の中にも羊が描かれている。

我が国の古文獻『和漢三才図会』巻二十七畜畜には、中国の「本草綱目」を引いて、羊の種数を書き、続いて次の文を記している。

羊の肉は疲労し体力のなくなった人を治し、小兒のテンカンを止め、女子の下痢を止める。然しソバ、麵、豆醬、醋とは合はず、乳は虚勞を治し、心肺をうるおし、乾えずき及び食べもどしを治す。くもに咬まれた時は其の毒けしとなる。

思うに我が国の羊は中国より舶載された動物であろうが我が国では、まだ繁殖していない。たむむれに羊に紙を食べさせると喜んで食べる。羊乳は蕃語で介伊辞(ケイイジ)と言う。

仔羊が親の乳を飲むときには必ずヒザマズク。これは恰も礼を知っているように見える。

羊の種に「黄羊(バンヤン)」という物あり、西蕃のどこにも産す。状は羊に同じ、よく走り、よく臥し、南方に産する物は深褐色で黒背白斑、丈は低く小さく、黒背白斑、鹿に似たり。其の皮ふとん・しき物に良し。

註・ヤギの事を述べているのであろうか。

我が国で初めて羊牧が開始されたのは明治元年大久保利通内務卿が下総国に始まり、明治四十一年には北海道月寒に種畜場が開始されている。

江戸時代、羊の絵を描いたものは殆どないが、前述のように長崎を描いた南蛮屏風や唐蘭船持渡図等に少し残されている。

に「万物の軋然として伸びる」様を示していると説明されている。

十二支の「未」の文字については、十二支の八番で「物は全て子より生れ、未に至り、未は味也。万物ができあがって滋味を生ずる也」と説明してある。十二支については、本来「天体の十二辰に象つてそれを月に配した事は確かであるが、其の十二月に多くの動物の中より鼠・牛・寅等と十二の動物を選んだ事については不明である」と諸橋轍次先生は「十二支物語の中に記しておられる。「羊」の文字の解説の古文獻としては「説文」があり「孔子、曰く牛羊の字は其の形を以て挙ぐ」：「羊は祥」なりとある。羊は孔子の時代、中国に中央アジア方面より渡つたと言われ、男の羊は「羝」、女の羊は祥又は狩。白い羊は粉、黒い羊は糶、子供の羊は狩または犖、大きい羊は羖と書くのだそうである。

我が国で最初の羊に関係した文献としては『日本書紀』の推古天皇七年(五九九)秋百濟よりラクダ二疋、驢二疋、羊二頭、白雉一雙というのがあり、続いて嵯峨天皇(八二〇)の時には新羅人よりの羊献上、平安時代の承平五年(九三五)になると大唐呉越の人より「羊献上」とある。以後、中国との交易が進むにつれて大陸より「異国の物」として持ち渡られた記録が残っている。

前回「十三集」でも記載したように二五七年(元龜二)長崎開港以来ポルトガル船が食用としての羊を持ち渡っているし、一六〇二年長崎イェズス会で編輯された「日ポ辞書」にも「ヒツジ」の項が取りあげられている。

江戸時代、長崎で羊の事を詳しく記したのは「安永之比」長崎の人大塚良夫等によつて作られた(二七二年頃)『長崎古今集覧名勝図絵』の「異国ヨリ持渡鳥獸草木図」の中に親子三匹の羊の図が描かれ、上に左記のような説明文が付してある。

阿蘭陀野羊 蘭語 保呂目と云
蘭人食用の獸也。毛色品々有り白多し、子を多く産む、臭氣至て甚し、人衣に伝染して去らず。羊は草を食み一同に咽坑に貯め置、折々取り出し之を喰す。是に於て不断、物を喰ふ如し、程は犬より少し大也。

又、長崎に残る羊の図の二に、桶屋町が「長崎くんち」のときに使用する同町の傘鉾の幕に刺繍されている十二支絵図の中に「二匹の羊」がある。幕の製作年代は安永元年(二七七二)とあり、伝統的長崎刺繍の代表作の一つとして長崎市有形文化財に指定されているが、其の刺繍の作者については不詳である。この十二支の図案は桶屋町傘鉾の飾が当時オランダ船が舶載してきた珍しい象型時計を模して作ったものであったので其の時計の十二支の文字に合わせて製作された作品である。

風信

○正月の行事は、天皇清涼殿東庭にて天地・属星・山陵四方を拝まれ、朝賀・小朝拜・元日節会と続くそうである。(内裏式・江家次第・続紀等)。

○其の正月の祝膳として「伊勢家礼式」によると餅・煎海鼠・焼栗・山の芋・里の芋を入れた大豆の味噌汁、仕立の雑煮が用意されたと記してある。之れに後世になると歯固として天皇家に献上される鏡餅・大根・瓜・鮎・猪鹿肉の中より大根を雑煮の中に加えるようになったと記してある。

○長崎地方の雑煮の古い記録としては、一六〇二年イェズス会刊の「日ポ辞書」に「ゾウニ・餅と野菜の汁、正月に食べる」と記してある。

○次いで江戸時代後期寛政年間(二七九七)の記録によると正月元旦 若水を汲み、茶を煮、神佛に燈火をかかげ、雑煮を供し、次に家内屠蘇にて相い祝す 雑煮は三ヶ日又は五ヶ日をかぎり家に食する也。又、膳の向ふには「うら白を敷き、其の上に塩鯛二、三枚ツツをすゆ。之を通例・「すわり鯛」という。

もし来客あれば先づ「手掛の台」を持ちだし、客の前に出し、屠蘇・雑煮を出す。雑煮は水菜・大根・牛蒡・するめ・こんぶ・南京芋里芋 六品を見合せ串にぬきて置き、だしを煮て餅を碗に入れ出す時に串をとりのけて中に入る。以前は干飽・煎海鼠を入れていたが、つゝしみある家では近來、之をはぶく。

註 飽・海鼠は輸出俵物として使用されていたが、寛政年間には之が不足し奉行所では困っていたので「つつしみある家」では遠慮して使用しなかった。

一 今月御寄贈いただいた本
広瀬隆先生著『文明開化は長崎から』(上・下)我が国の文明開化の始まりを長崎を中心に捉え取り上げられている内容で、今までのれ程までにとらえた研究資料はなかった。日本文化の研究を志される人には是非御一読いただいておかねばならぬ貴重な論考であった。(集英社刊・上下で三九〇〇円十税)

